

震災復興リーダー支援プロジェクト

Support our Disaster Recovery Leaders - Relieve, rebuild and re-start Japan

経過報告レポート (2017.1.12-2017.3.11)

Contents

- P.1-2 「ジョンソン・エンド・ジョンソン×ETIC.右腕プログラム」最終合宿
- P.3 右腕経験者に聞く、「私と右腕プログラム」
- P.4-5 今季のトピックス
- P.6 プロジェクトの進捗
- P.6 ご支援ご寄付のお願い

1

「ジョンソン・エンド・ジョンソン ×ETIC.右腕プログラム」最終合宿

2017年1月16日～17日、宮城県石巻市のコワーキングスペースIRORIにて「ジョンソン・エンド・ジョンソン×ETIC.右腕プログラム」の最終合宿が開催されました。本プログラムは、東北の健康に資する活動を展開する団体に対し、右腕による人的支援とメンタリングを主とした経営支援を行うものです。

● 1年間の成果や課題を発表

1期に続き、今回の2期6団体においても福祉、食、ものづくり、まちづくりと、そのアプローチは多岐に渡ります。本プログラムのテーマは「健康」ですが、地域の人々が健康・豊かに暮らす上では、さまざまな分野からの課題設定と、多様なプレーヤーを巻き込んだ取り組みが必要であることを示しています。

2015年夏の団体選考に始まり、2015年11月キックオフ合宿、2016年5月中間合宿を経て、今回の最終合宿は右腕の着任期間の完了を迎えるタイミング。いわばプロジェクト成果の最終発表の場となります。参加者は、各団体のリーダー・右腕・スタッフ、各団体に地域で伴走してきたコーディネーター、各分野の豊富な知見を持ったメンター、ETIC.スタッフ、そして本プログラムに多大なご支援をいただいているジョンソン・エンド・ジョンソン関係者の計33名。

合宿は各団体からの成果報告のプレゼンテーションからスタート。右腕の参画期間である1年間の経緯や成果、課題を発表しました。当初、右腕募集でもっとも苦戦したのは、豊間協働加工品販売会(福島県いわき市)です。津波により失われた地域住民のための買い物・交流の拠点をづくりたいというプロジェクト。期待した若い右腕の応募はなく、キックオフ合宿では唯一の右腕不在という状態でしたが、その後、地元住民の中から選ばれた複数人で右腕になるという、これまでにない“右腕チーム”の体制が実現しました。もともと地元の“とーちゃん・カーちゃん”がボランティアで集まった体制だったため、商売として利益を上げることに抵抗を感じていました。しかし、メンターとの対話を通じて次世代につなげる覚悟と主体性を見出したチームは活気に満ち、そんな背中を見た学生があらたに体制に加わるなど、多様な広がりが見えてきています。



● メンタリングを通じた深い気づきと学び

合宿では、メンターとの対話を通じて、各団体のめざす姿や目的を問われ、置かれた状況を解釈し、それぞれの次の一歩を見出すプロセスを積み重ねていきます。本質的な問いは、場当たりの回答や現実に対峙することを避ける姿勢を許さない厳しさがあります。それでも悩み考え抜いた末にたどり着いた気づきや決断は、その後の歩みをより確かなものとしてくれます。今回の合宿でもそうした場面が何度も訪れました。

三陸石鮎工房を営むアイローカル(女川町)の厨氏は、地域に対する事業の意義やそこに対する自身の思いをくり返しメンターから問われ続けた1年半でした。今回は新たなメンバーも加わり、本設店舗のオープンも実現するなか「水産加工研究会などから、わかめ石鮎をつくっているだろとお声がけいただくようになった。地域で仲間として考えてもらえるようになった」といった手応えを感じていますが、起業家として、リーダーとしての自身のあり方を見つめ直すことは、今後も折にふれて向き合い続けるべきテーマと言えます。

障がい者の生活支援サービスを提供する、むそう(名取市)の渡邊氏は、利用者に寄り添うことにこだわりを持っています。しかし、現場への視点が強すぎることは、リーダーとして地域に広げていくべきインパクトを考える視点が欠けることにもなります。メンターからは、地域としての特徴ある福祉サービスの魅力づくりを通じた行政を動かすためのアプローチなどについて、実践にもとづくアドバイスが投げかけられました。

● 広がるつながり

1日目の夜は懇親会を開催。ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人社長である日色保氏にも合流していただくことができました。サプライズで豊間からの「さんまのポーポー焼き」や、福島からの日本酒も持ち込まれ、食を通じた交流も進みました。さらに、1期の参加団体である、愛さんさん宅食の小尾氏も駆けつけ、近況をご報告いただき、2期の各団体との今後の連携も感じさせる場となりました。



● 最終発表でのそれぞれの現在地

2日目の最終発表ではメンタリングを経てブラッシュアップされた、各団体からの集大成となる発表を行いました。福島有機農業ネットワーク(二本松市)は苦難の道程でした。農業者のネットワーク組織という舵取りが難しい組織特性ではありますが、想定以上に途中で大きく経営体制が変わりました。右腕として着任した東山氏は、自身の役割の前に、団体としての目的や役割を模索する期間に多くのエネルギーを割いてきました。最後に代表の浅見氏から出た「ようやくスタート地点に立った」という言葉は偽らざるものだったはずです。

石巻市の富貴丁通りの活性化に取り組んできた日和キッチン(石巻市)の天野氏は「年収200万円でも豊かな暮らし。物々交換で生業が可能。自分が所有しなくても、必要なものを借りられる関係。そういう暮らしを自分たち自身が楽しんでいるところに人が集まっていると感じている。『富貴丁izm』という、お金がなくても幸福という暮らし方を広げていきたい」と語り、自分たちのスタイルと価値を定義できたことで自信に満ちた表情が印象的でした。

障がい者雇用のビュッフェレストラン「六丁目農園」などを運営するアップルファーム(仙台市)は、代表の渡部氏ひとりの“渡部商店”という状態からチームとしての姿が見えてきたことが大きな変化でした。右腕の丹野氏は「今後に残り、人材育成にも注力していく」と語り、スタッフの阿部氏からは「社長は経営に特化する分、現場の動きや考え方をどんどん取り入れ、社長に上げていきながら、社長の思いに寄り添ってやっていきたい」との言葉も聞かれました。

日色社長からは、個々の団体に対する丁寧かつ的確なアドバイスとともに総評をいただきました。「企業の事業マネジメントと東北の団体の運営は異なるもので、評価の仕方が企業とは違うと思っていた。しかし、あらためて発表を聞き、違いはあるものの、成長していくうえで自分たちが企業経営で見るべきものや苦労するところと共通性が見えた。われわれ企業サイドが、寄り添って、一緒にできることがあるのではないか、ということにも気づいた。」



● これからに向けた可能性

合宿の最後のセッションは、発表を終えた各団体・メンターが会場をひとつの場として対話を行いました。まだ解消できていない疑問や悩みの相談、具体的なやり方へのアドバイス、今後に向けた意気込み。さらに団体を越えた連携のアイデアも湧き上がり、大きなチームとしての一体感とこれからの可能性を感じる場となりました。

チェックアウトでは、ETIC代表の宮城がこうした取り組みの価値について言及しました。「それぞれの団体が、チームの多様性や地域の価値の見出し方など、これからの日本が必要としているものを持っている。ただし、それを既存の物差しで表現しようとすれば陳腐化してしまう。数字以上の大切なことを持っていて、そこに魅せられて活動しているのだと思うが、それを既存の言葉で伝えられるようにする努力もまた必要。」

そして、最後はメンターの石川治江氏(ケア・センターやわらぎ)から「すべての人は成長したい本能を持っている。今日の前のことをやる。それを一所懸命やらずして未来のことはしない。でないと一条の光は見えてこない。心配や恐れを感じた時にそれを乗り越えてできるか。自分の中にある本能を呼び覚ますこと。必ず人とカネはついてくる!」という強く背中を押される言葉に勇気をもらい、帰路につきました。

ジョンソン・エンド・ジョンソン社とは、こうした機会を通じた気づきや学びの大きさや、今後の連携の可能性について共有しながら合宿を終えました。引き続き、企業と地域との価値共創のありかたを模索していきたいとの思いを新たに2日間でした。

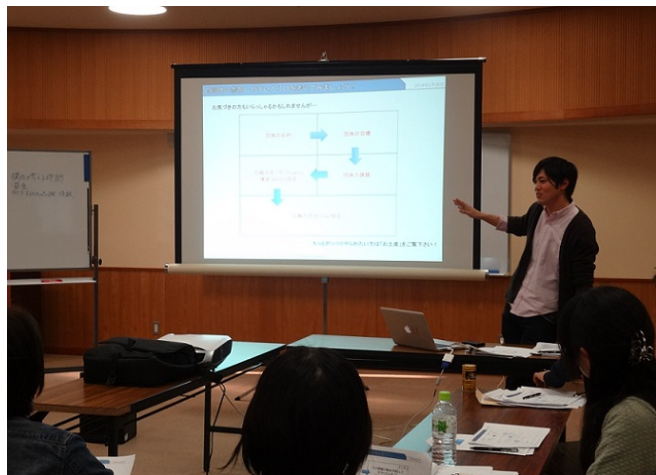


2 右腕経験者に聞く、「私と右腕プログラム」

2011年5月から、東北の様々なフィールドでプロジェクトを立ち上げたリーダーのもとへ、そのビジョンに共感し共に事業に取り組む右腕人材を送ってきた右腕プログラム。今回は、右腕にとってこのプログラムはどのようなものだったのか、実際にふくしま連携復興センターで右腕を経験した元岡悠太さんに話を聞きました。

●社会人経験を、右腕として活かせると思った
——元岡さんは、右腕としてどのような仕事をしていたのですか？

元岡さん：福島県の「ふくしま連携復興センター」で、NPOの中間支援をしていました。NPOの課題抽出や、行政と連携したコミュニティ形成プロジェクトの立ち上げ、団体のwebや広報媒体の制作、団体の活動情報の可視化などです。また、1年の右腕期間のあとも、まだまだ自分は福島でやれることがあると感じたので、3年間福島に残り、地域おこし協力隊などの仕組みを使った人材獲得、育成を行っていました。



▲右腕時代の元岡さん

——そもそも右腕を始めたのは、どのようなことがきっかけだったのですか？

元岡さん：私は東日本大震災を東京の大学に通う学生時代に経験したのですが、当時はなににもできない無力感を感じていました。そのため、まずは社会人経験を積んでから、何か東北に役立つことをできないかと思っていました。

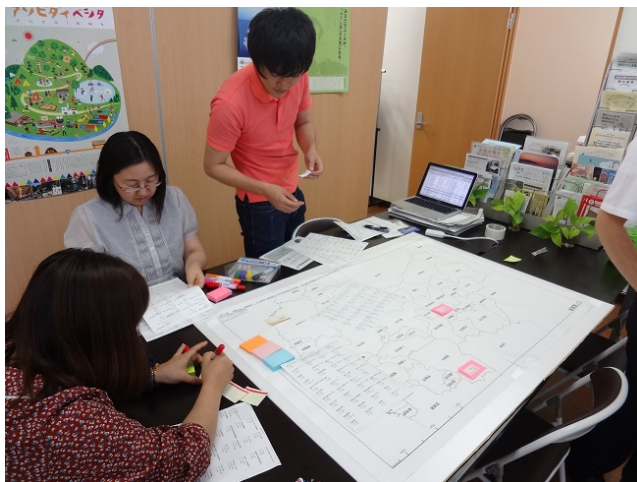
新卒でネットマーケティングの会社で1年働いたあと、家族から「社会人になってから、つまらなそうにしている」と言われて、あらためて自分のやりたいことは何だろうかと考えました。そしたら、「被災地のコミュニティづくりに関わる仕事がしたい」という思いが湧いてきたんです。そこで、「みちのく仕事（現在は東北ベンチャーズ）」のサイトに載っていた福島連携復興センターのコーディネーターに応募したところ、採用していただき、福島で働くことになりました。

●マネジメントの苦勞を乗り越えて得た手応え
——右腕をやっていて、大変だったことはありましたか？

元岡さん：行政と県内のNPOと協働で、事業立ち上げを行ったことですね。NPOに半年出向してやったのですが、マネジメントの経験がなかったこともあり、事業や人材のマネジメントが難しかったです。人材が辞めてしまったりと、大変でした。

——それでは逆に、嬉しかった経験は？

元岡さん：これも事業立ち上げに関わった際のことですが、直接避難者の方と触れ合いながら、コミュニティが出来上がっていく過程をチームメンバーと一緒に実感できたことが嬉しかったですね。例えば、自分たちが開催したイベント以外でも、知らないところで避難者の方同士がつながっていくことがあったんですよ。一緒に温泉に行ったり、集まっていたりしていたそうで、そのことを聞くと「コミュニティができていな」という実感になって、嬉しかったですね。



——現在は元岡さんはETICのスタッフとして働いていますが、東京に戻るきっかけは何だったのですか？

元岡さん：私は福島県で課題を抱えている方の支援をしてきましたが、その対象範囲を全国に広げていきたいと思ったんです。私は、社会的企業が全国に増えていくことで、困難な状況へのセーフティネットとなると考えています。そうしたソーシャルベンチャーのサポートをするために、東京に戻り、ETICに参画しました。

——それでは、右腕の経験を今後どのように活かしていきたいか、教えてください。

元岡さん：ふたつあります。ひとつは、福島で「誰かのために役立つことの喜び」を感じることができたので、自分の中でその喜びを大切にしていきたいと考えています。もうひとつは、創業期の社会的企業に関わる機会が多かったため、社会的企業の経営をしている人の気持ちに立つことができるのではと思っています。この、右腕の経験をしたからこその視点を活かしながら、社会的企業が存続していくための支援をしていきたいです。

■ 昨年から募集を開始した【気仙沼右腕プログラム】

宮城県気仙沼市では、総務省が推進している「地域おこし協力隊」の制度を活用して、気仙沼の基幹産業を支え、そして3年後には自ら気仙沼で事業をつくっていく人材を募集しています。(NPO法人ETICは、気仙沼市との業務委託契約により、人材募集・マッチングを担当しております)

全国からエントリーを頂いて、以下のプログラムでは右腕がマッチングし、活動を開始しています。

●すでにマッチングしているプロジェクト

・気仙沼地域エネルギー開発株式会社

取り組みを紹介しているETIC.運営の「DRIVEメディア」では、気仙沼市地域おこし協力隊員第1号でもある小柳智蔵さんが紹介されています。

「若者たちが山へ柴刈りにいく未来へ〜半林半Xと地産地消エネルギーの挑戦」

<http://drive.media/posts/14660>



・気仙沼まち大学運営協議会

まち大学のプロジェクトでは、気仙沼出身の20代2名がマッチングしました。地元・気仙沼を盛り上げたいという想いでUターンをして活動していきます。



今後は気仙沼で活動を開始した右腕たちのサポートを、市役所・現地団体と連携して行っていきます。現在、残り3件のプロジェクトで引き続き、右腕を募集しています。

詳細は「TOHOKUベンチャーズ(気仙沼ページ)」をご参照ください。

<http://tohoku.localventures.jp/area/kesennuma/>

■ 2016年度「Reborn-Art x 右腕プログラム」

2016年度、宮城県石巻エリアにおきまして、一般社団法人APバンク、ヤフー株式会社、一般社団法人リボンアートフェスティバルと連携した「Reborn-Art x 右腕プログラム」を実施しています。「Reborn-Art」とは「人が生きる術」を意味する造語です。2017年夏に牡鹿半島を中心に開かれる国際芸術祭「Reborn-Art Festival」と協働し、「生きる術」を駆使する起業家コミュニティが誕生し、地域の社会資本を充実させる循環が生まれることを目標に取り組んでいます。

2016年度は6件の受入先を採択し、起業型・経営型の右腕人材を募集しました。うち3件は、この春からの右腕の参画が決まっています。

●Reborn-Art x 右腕プログラム2016年度プロジェクト

- ・一般社団法人イシノマキ・ファーム「六次化商品開発、クラフトビール醸造とファームステイプロジェクト」
- ・ヤフー株式会社「民泊事業化プロジェクト」
- ・一般社団法人リボンアートフェスティバル「牡鹿ビレッジプロジェクト」
- ・Tree Tree Ishinomaki「石巻こけしカルチャープロジェクト」
- ・石巻うまいもの株式会社「魚の街"石巻"で水産業を要に盛り上げるプロジェクト」
- ・一般社団法人ウィーアーワン北上「コミュニティフードコーディネータープロジェクト」



石巻から新たな文化を発信！

**Tree Tree
Ishinomaki**



■ローカルベンチャーラボ

地域での起業に向けてのステップを踏むことのできる実践型プログラム「ローカルベンチャーラボ」を、地域の実践者をメンターとファシリテータに据え、今春立ち上げました。

ローカルベンチャーラボは、「観光・交流産業」「不動産・エリアブランディング」「環境配慮・循環型ビジネス」「地域商社」「自然資本産業」「安心・豊かな暮らし創造」の6つのテーマ領域を設定し、半年間をかけてフィールドワークやメンターとの対話、参加者同士の議論などを重ね、自身の事業構想を磨いていく場となります。

参加者は、都市部のビジネスパーソンを中心としながら、各地で既にチャレンジを始めている層も巻き込み、単なる学びで終わらない、熱量の高い場づくりを目指しています。

また、各テーマラボに閉じた場に終わらず、特別ゲストをお招きするオープン参加可能な特別セミナーの企画や、ローカルベンチャー推進協議会(ローカルベンチャーの育成創出を地方創生戦略の柱に据える自治体の広域連携組織)との連携のもと、地域での人材受け入れ体制の整備にも注力していきます。

※ローカルベンチャーラボ公式サイト <http://localventures.jp/>



■熊本ソーシャルイノベーション戦略会議

2017年2月5日(日)、ホテル熊本テルサにて「熊本ソーシャルイノベーション戦略会議」を開催いたしました。

発災から1年が経った熊本地震。ただの復旧にとどまることなく、この地震を新しい未来を創る契機にするべく、「熊本ソーシャルイノベーション戦略会議」では小野泰輔熊本県副知事をはじめ、行政職員、大学教授、メディア関係者社会起業家、地域おこし団体関係者、学生など、世代やセクターを超えた約50人にご参加いただきました。

またゲストには、東日本大震災後も「東北右腕プログラム」などの活動で支援を続けるNPO法人ETIC.代表理事・宮城治男、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県女川町復興のキーパーソンであるNPO法人アスヘノキボウ代表理事・小松洋介氏、能登半島地震を契機にまち育て、ひと育て、みせ育てのコンセプトのもと、七尾市の様々な地域づくり事業に携わる(株)御祓川代表取締役・森山奈美氏をお迎えし、復興のプロセス等についてもお話いただきました。



■みちのく復興事業シンポジウム

みちのく復興事業パートナーズとNPO法人ETIC. は3月6日、「みちのく復興事業シンポジウム」を開催しました。パートナーズは、企業が連携して東北で活動する復興リーダーを支えるプラットフォームで、いすゞ自動車、花王、JCB、東芝、ベネッセホールディングス、電通の6社が参画しています。

今回で5回目となるシンポジウムでは、東北の現状と課題を踏まえながら、「セクターを超えた協働で、地域社会の未来をつくる。」をテーマに、東北で活躍する団体の代表や行政担当者らが企業の関わり方を探りました。

企業のCSR担当者ら約200人が参加したシンポジウムでは、セクターを超えた協働の先進地として、東北から釜石市オープンシティ推進室室長の石井重成氏、NPO法人アスヘノキボウ代表理事の小松洋介氏、一般社団法人ISHINOMAKI2.0代表理事の松村豪太氏が登壇。それぞれ「観光」、公民連携による「地域主体の健康づくりの仕組み」、地域の担い手を育てていく「人材育成」のテーマで、セクターを超えた協働事例を発表しました。

また、パートナーズが推進する「事業ブラッシュアッププログラム」に参加した団体の代表者が、専門家のメンタリングなどによる6カ月にわたる同プログラムの成果も紹介し、企業によるセクターを超えた協働事例の創出支援について発表しました。



4 プロジェクトの進捗

2017年3月11日の時点で、149のプロジェクトに253名の右腕人材が参画してまいりました。参画期間（1年間）が終了した右腕人材（社会人に限定）の約68%が継続して被災地に残り、そのうち21名は自ら起業するなど、彼らは被災地での重要な役割を担いつつあります。現役（参画期間中）の右腕とあわせると、現在149名の人材が、東北の担い手として活動を行っています。

2013年に新たに設定した、「5年で300名」の参画に向け、今後も精度の高いマッチングと各種サポートを行っています。



5 ご支援・ご寄付のお願い

本プロジェクトについては、スタート以来、国内外の個人・団体・企業の皆様より大きな関心を頂戴し、現在のご寄付・助成金等の総額は、934,640,913円という多額のご支援をいただいております。この場をお借りしまして、改めて心より感謝申し上げます。本プロジェクトは、当初、2013年度末までの3年間を目安に取り組んでおりました。しかし、東北の復興が本格化していく中で、中核事業である右腕プログラムへのニーズは、更に高まってきており、2015年度末までの中長期計画を策定し、取り組んで参りました。

右腕プログラムは、2016年度より新たな5カ年計画を設定し、今後の東北の復興、さらには新たな地域創生に向けた取り組みへと進化を目指していきます。皆様におかれましては、「震災復興リーダー支援基金」のPRへのお力添えははじめとして、事業連携や各プロジェクトへの個別のご協力など賜りますよう、引き続きよろしくお願い申し上げます。

>>寄付ページURL http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/donations_support

《ご寄付の受付》

■Global Giving

<http://www.globalgiving.org/projects/sponsor-fellows-for-tohoku-and-japans-recovery/>

※米国在住の方は、GlobalGivingから寄付していただくと、税控除を受けることができます。

■American Express（メンバーシップ・リワード）

http://catalogue.membershiprewards.jp/viewAwardDetail.mtw?productId=4487681&categoryName=jp_21a_charity_tohoku

※アメリカン・エクスプレスのカード会員さまは、ポイントによる寄附ができます。

連絡先・お問い合わせ先

◆NPO法人ETIC内 震災復興リーダー支援プロジェクト 事務局（担当：山内・押切）

東京都渋谷区神南1-5-7 APPLE OHMIビル4階

mail : fukkou@etic.or.jp Web : <http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/index.html>